

22日に祖父江文宏のステージ

福祉人であり、演劇人でもある祖父江文宏（CAPNA 理事長）が『小さい人へ・・・』のタイトルで、これまでの集大成というべきステージを務めます。

6月22日（土）午後1時30分から。場所は、名古屋市中区栄、ナディアパークです。2部構成で、第1部は、大阪大学助教授の西澤哲さんとの対談。子どもたちと共に暮らし、子どもたちから多くのことを学んできた二人が、小さな魂の救済をテーマに語り合います。援助の現場の体験から、深遠な哲学談義まで、幅広い内容になりそうです。

第2部は、祖父江理事長の自作詩の朗読。自然音楽家の高野昌昭さん、横笛演奏家の芳原洋一さんが伴奏で盛り上げます。

入場料は、一般2000円、CAPNA会員1000円です。

祖父江理事長は、肺の病気で自宅療養中ですが、このステージに全力で臨む決意です。

皆様、ぜひご参加ください。

メールマガジンにご登録を

CAPNAのさまざまな情報を電子メールでお届けする「メールマガジン」をご利用ください。イベント、出版物、虐待防止関係のテレビ番組の案内などを不定期に送らせていただきます。

メールマガジンに登録をご希望の方は、「登録希望」と表題を付け、お名前、メールアドレスを記入の上、管理者加藤 katostsu@mvh.biglobe.ne.jp までメールをお送り下さい。CAPNAがますます身近になります。

訂正とお詫び

3月発行の22号で、CAPNAへご寄付をいただいた団体のお名前を紹介させていただきましたが、その中で、下記の5団体のお名前の掲載を漏らしてしまいました。せっかくのご好意をいただきながら、失礼を心よりお詫びします。

- ▽ 名古屋和合ロータリークラブ様
- ▽ 名古屋守山ロータリークラブ様
- ▽ 名古屋名城ローターアクトクラブ様
- ▽ R.I.D.2760 東名古屋区分合同ローターアクト委員会様
- ▽ 在日米国商工会議所様

CAPNAニュースレター23号（隔月刊7号）

2002年5月31日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

ホームページ <http://www2.ocn.ne.jp/~capna/>

キャプナ★ニュースレター

魚と花と石の名前 祖父江 文宏

あなたは なにを 見ているの
そんなにも いっしょうけんめい
魚のように 見つめて
あなたは なにを 見ているの
教えてください わたしに
あなたの涙が
海を映すのは なぜ

あなたは だれと お話しているの
そんなにも いっしょうけんめい
花のように 立って
あなたは だれと お話しているの
教えてください わたしに
あなたの声が
風となるのは なぜ

あなたは なにを 聞いているの
そんなにも いっしょうけんめい
石のように 黙って
あなたは なにを聞いているの
聞かせてください わたしに
あなたが居るだけで
希望を感じられるのは なぜ
聞かせてください わたしに
あなたの 見たものを
あなたの 聞いた言葉を
魚と花と石の名前を

Vol. 23

「子どもの人権」守られる社会を目指して

—CAPNA 7周年定時総会から—

CAPNA 7周年定時総会が5月25日、ウイルあいちで開かれました。300人近くの会員の皆様にご参加いただき、2001年度事業報告、決算報告、2002年度事業計画案、予算案を承認いただきました。森田ゆりさん（エンパワメントセンター）、峯本耕治さん（大阪弁護士会）の記念講演も、すばらしい内容でした。トピックスを紹介します。

総会の冒頭、虐待によって命を落とした多くの子どもたちの霊に、1分間の黙祷を捧げました。

続いて、車いすで壇にのぼった祖父江文宏理事長は、自作の童話「マントルピースの上の石」を朗読しました。

息子の失敗にカッとになって、せっかんにしてしまうお母さん。それでも息子はお母さんを思い「手でたたくと痛いから」と棒を差し出す。その棒が折れると、石を持ってきて「これでたたいて」と言った。その時、お母さんは初めて、自分が間違っていたことに気付いた。そして、自分への戒めとして、マントルピースの上に石を置き、以後、二度と息子に手を上げることはなかった、というお話。

暴力からは何も生まれません。私たち大人一人ひとりが、「マントルピースの上の石」を心の中に持つべきではないか、と訴える内容でした。



「マントルピースの上の石」を朗読する祖父江理事長。
6月22日にも渾身のステージを務めます。（4面参照）

森田ゆりさんは、人間の攻撃行動として「戦争と体罰」を挙げ「どちらも良くないことだけれど、やめられないと思われている」と指摘しました。戦争は、正義のため、国民を守るため。また、体罰はしつけのために必要だと考えている人がまだまだ多い、ということです。日本では、75%の人が体罰を容認しているというデータも紹介し、しっかりした法律をつくることの大切さを強調しました。



力強い語り口で会場を魅了した森田ゆりさん。
エンパワメントの視点に皆が心打たれました。

また、戦争や体罰によって傷つき、トラウマをかかえる人たちの「不安」や「怒り」の感情について取り上げ、その人が本来持っている力を重視する「エンパワメント」の重要性を訴えました。

2000年に制定された児童虐待防止法について「子どもの人権を尊重するというビジョンがない。虐待が増えたから法律を作ったというのでは無意味だ。子どもの人権を全面的に認めたくない議員が多すぎる」と厳しく批判。DV問題なども含め、当事者の子どもたちの包括的な権利擁護（アドボケイト）制度の制定を訴えました。

国が虐待防止、DV防止のために使うお金はあまりにも少なすぎる。これでは手厚い保護はできない。もう耐えることはやめ、福祉現場から怒りの声を上げよう。子どもたちの発言の場をつくらせよう、と力強く締めくくりました。

英国との比較を通じて、日本の虐待防止システムの課題を指摘する峯本さん。



峯本さんは、イギリス滞在中に児童虐待防止制度について学び、日本との違いを痛感したそうです。

一番の違いは、ソーシャルワーカーの活躍する場がいっぱいあること。病院、警察と連携し、家庭内での子どもが不審なげがなどをすると、すぐにワーカーが訪問する。学校にもスクールソーシャルワーカーがいる。つまり、ワーカーが介入して適切な対応、援助をしていくことが、社会の基本姿勢になっていて、困っている人が「助けてほしい」と言いやすい社会であること。

日本は、これまで集団が基本となって、集散的に物事を考える社会だったが、これからは個人をベースにしたシステムをつくっていく必要がある。民間団体を含めた効果的なシステムを議論していくことが大切、と強調しました。

具体的には▽虐待が起こる危険性のある家庭について、早い段階から取り組むことが重要。コスト面を考えても、事後介入よりも予防に力を入れるべきだ▽機関連携のコーディネーター体制を早急に整える必要がある。地方の特性に応じてモデルをつくり、厚生労働省を中心にシステム化していくことが大事▽学校でのサポートを実効性のあるものにしていくために、ガイドラインづくりを。今のままでは、教師たちの理解が乏しく、傷ついた子どもたちを守れない▽個別の子ども保護プランを立て、当事者の親や子どもにも参加してもらって、実行していく。▽裁判所に、もっと後見的作用を持たせ、「ケア命令」（命令に違反したら親子分離する）などの柔軟な対処ができるようにする—などを提案しました。